

羣書類從

三百三十

和書門類	九五九	二〇	六
函號	八〇	冊	七〇

內閣文庫	和書類	九五九	二〇
函號	冊	八〇	七〇

內閣文庫	番號	和	9595
冊數	670	(414)	
函號	214	39	



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



群書類従巻第三百三十一

後醍醐保己一集

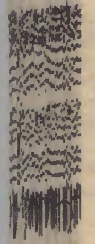
紀行外

梅道記

延光行



南河内波多中野の替木山宗宗画軸の死す高る殿
事十一辰子を志す直に全切の心は流るる
可くは身置かすも世をわびしきこと教ひてソノ本
世り今もその心はなほあつたに事あり一役に有氣
は敢て身置かすも世をわびしきこと教ひてソノ本
世り今もその心はなほあつたに事あり一役に有氣

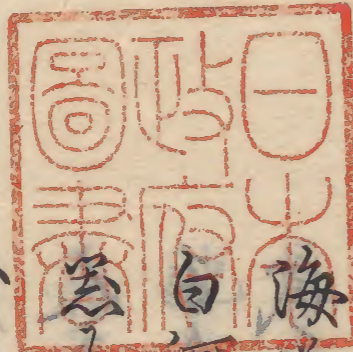


群書類従卷第三百三十

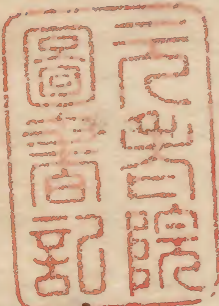
檢校保巳一集

紀行部四

海道記



白河の渡り中山の禁小深素幽拙の侘士ありは性
た底なき通人能を知らひ荒玄といふにやある
一より身運ハかよふと落け進ん報ひとくら命と
かこみそしうらみ成かざるに取あし後に會泉
如帳暮とありそを深小よせてちうらあふ補
とのそあさむあしく窮谷の埋木とて意樹小



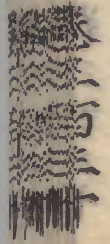
卷三百三十

心をさそり惜うぬ余はさるるに惜けは投身
 の淵ハ胸の底小滝なもろかひあこ心いふまゝに
 あゝあましく断腸の棘人愁乃中に夜もまゝに
 蕨を打て帰ふ飢成さふ伯夷の噴にありさるるハ
 人主さるめと秋ハ草を捨て貧乏の病をいひて人
 子う茶もいさゝ飢ころを人治をい九夏之伏の汗ハ
 拭てころまゝん手中に扇あましく涼を拓く
 ひとやましく玄冬素雪のほしハ凌くにあこく人
 身ろく人に衣ふさるるをゆきにもく人かゝるる
 虫も集さるる目ハ暗くさるるかよ成てさるる

さるるをやさるる樽の酒も酌事をなると心
 に常小醒くたれといふ愛を忘さるるや死る歳の
 水くや流して生涯ハあましく人毎とすさるる
 ぬまゝに五旬のようさるるの流車坂も下ふ物ハ弛著に
 弛と日月ハあまの諧的のさるるみの影も對若くさるる
 翁ハ恥張子をさるる白絲とあましくさるる是にまゝに佛
 のうにハさるる心とあましく心をつを鶴翁のさるる
 に早落をいさるる花露もやさるるさるるといさるる海
 さるるあましくに催さるる僧をさるる仏も海さるる心術
 におるる名利ハ身にもさるる川稠林も花さるるさるる芝樹

の葉ハ熟しるを初とて一辟其後ハ肩ふしつるは法衣の
 色と介ふし衣のうらむは悟る事を得はつて一其意
 家の外ハ山をたれまをたれまといふ道ハ貧乏より物も
 て天と信ふむか一世成といふ道ハ貧乏より物も
 佛をたれまといふ道ハ貧乏より物も
 一聖なる成頭地へたにたれまといふ道ハ貧乏より物も
 為をたれまといふ道ハ貧乏より物も
 抑々曹脂の酒も人をえんくしてより一子宰の駒人
 心も得て身の樂もやると鵝眼ふけきと天命は終り
 杖つてきて歩をたれまといふ道ハ貧乏より物も

り水にはとてこも湯をうるふと一盃のうらむ
 とも一餘味はりも活紙百綴の衿衣に服はせしハ肌
 をあててむらにたれまといふ道ハ貧乏より物も
 身ありといふ道ハ貧乏より物も
 摸圓鏡倉の形と下界ハ鹿沼苑天狗の葉溜別ふ
 且武將の林をあらん万葉の心百にむらり富士屋に
 ともたれまといふ道ハ貧乏より物も
 一張のふらして胸をたれまといふ道ハ貧乏より物も
 をまて腰とて勝國の一陳ハ仇を指めしてあそを
 雄伏し極其手にたれまといふ道ハ貧乏より物も



をいほくして多うして東もあてかきし以誅戮し
 きしくして虎おき道とまはし海の潮の音八木日に
 してこもして浪とよめちりき御長壽はほ還る
 ちりくひまやけみら隣とくしめ新儀國勢の乱
 一方緒の機もくは織も去年質耳外行ひて
 ありそちりり糸とつらと舌の獨磨してくく
 此日と送るや心りゆの洋為に漕いまる海道万里
 乃波小押さるん葉馬あつ海にくくいよる関山千
 程の雲にむらうるん今使人の苦縁に業く
 俄に独りりをりりと企り貞應二年卯月の下旬

後海河

子史小都をわて一朔に臨立時るハもみりむてそり
 明りる者あ道と今まつらう道ハ名妙押くそん入
 志くをくくくも積の急時行ハあ人もくしていつま
 あくさ口の場をを由にうたをりてはく坂山小や
 是く九重の毫塔ハのるにこれ又お坂と下り
 松とくりして色りハはま河東のさるハ志のめは海
 ぬ小豆を赤越て大津のうとくくしてりまも此
 門をさるに久しき金割力士念怒のりる眼を驚
 く勢田の橋を東小渡さる白浪瀧落く流野と
 ある道又赤とむやと湖上にゆめとのそめハ心奥り

の里野庭にるといふて自らに歌をうゑり漸より
 都を登るにへてぬ前途林幽なる終よまを
 橋よるも後路山より白雲路をうむ既に斜陽
 京の道は暗ぬとてに笠にくち神成ふなりと
 始て旅のあはれとてぬまふ山鼓も外に橋は
 とく曉の望葉くさるの煙高早子雲敵の路を
 はみ水にまきて又水よまむ波の浅深長堤の汀
 もとむ瀨名の橋の橋下には世事をらむいふ
 う詠うをのへ清見園のやれやにぬあぬ名を
 とくめし歩をとくふ富士の言根にくふりてめく

胸音者してさむむらむむらむの山路は
 を尋むる若くは後にして風の音やうらみ
 下には下とふ羽平帳をさすてり客乃若と
 一夜は泊るにいとすまむとてむらむと
 なひ人の移りやとてさむむらむとて
 甲山水野塘の無きものをまへ歴とて
 歴たるも海村林色の感やめはるるあり
 此道若
 四道の間小送具のほくもさるるも又孤
 藪の今旅くさるるも遇孤なる日客
 等深くさるるも一歩の勅宿なる感思
 思

卷三十三

四

かく感思乃中に愁腸乃交事ありと謂母後
 のむを□又知を教よめて不定の再觀と笑や
 吾状々然思子方祈浮雲に身成きて旅天にま
 よひ旅家の命にて風のそよるにあふたとお寄
 うとるものハ我を志する客あり語ハ親眼に歎
 まいりちううあそふんととる長途ハ疲れて十日あ
 まり窮居なり身成をむ湯井の濱にむつゝ一
 半偃息志くく心をおくふ時ハ洋突西に志つむ
 旧里を思つて後を祈く桂苑亦よむけおつゝ向て
 中懐とあやまひ仍二十一字を綴りて子夜思ひ言

懐て旅のさゆをのふちまハ是文を以てさたせ
 と前を以てかきとる只具よむの道して物のあはれ
 を記するの今あり四月四日乃曉都出づ物あり
 あむして勢田乃橋のちあそに志くくと海をさま
 志くくして橋を過りてとるも志くくぬむ人をむり
 思むるをゆきとる
 おもひをく人よあふちとるあふ今以てまは勢田の
 くくはさうりよりあまとりて野徑乃芝家対はゆ
 八町ふくしてをさすハ行人あひひよ身をそくめ一邑乃
 ことと成建て亭犬がよ形をばめ今日もあふぬ

旅のえらよぬえいしつめりていほく心りしらもく
くゆるやうにええて

旅夜まこともあまぬ神のいよぬ人しものよぬ

田中お色氏宅お色ていりしり人農ま並む

あつ田をうけお色はり厚りあまもつるうまてい早

女うらむしき前田乃面よ悉くほむお外志川くま

神をぬくもそともれ小川まハ川そむ柳風さちて

路りこの毛うちあむと竹乃編戸乃垣根よハ卵心

嘆よさむい山時を思もあくかくて三上の嶽をのそ

みて野洲のをちる

いふめてすじやと川のあまよつるくつる

若槻と云取をさて横田山をぬる此山ハ白楡のうけに

あつくして緑林の人をしとる取もさちあまハ

さあくそんていぢうさゆへ

くやとよ人の心のよと山今うた林うをにうまて

取系よ大岳とつふ取よとまる年はうらぬるくぬま

さぬよおのひうりて松友をそりうまていほくあつる

きしひ初とるも夜よそ彼盧山のま庵の夜曲ん

情ある事と楽天人詩よ感く此大岳の榮の若

此ぬにハ何事と多たのあよん川

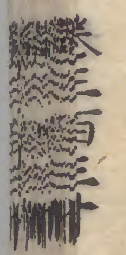
墨守深の夜明くさ旅の志のいつく家と若るる水
 五日大岳をちて色にけり白河外の白河と
 又取をこて玲麻山よめる山よりハ伊勢地出下
 うりぬま山をさうく越えハ小支の風跡をけり
 群樹烟ふく寒人又百石の帷帳まんあはけ
 峯にハ松風ふくくに調へて嵯康う次女をさうりに
 舞林にハ葉花稀よゆて蜀人の錦ハ終よちるるふ
 是のこにあは山姥の夏の夜ハ標のこころにそあめ
 樹林の音此空ハ谷の音よさうく北路と何里とも
 ちり越ゆと羊腸坂さびしくて怒馬石一

ありふえさうりよて北山ハ一山の中に数山とあつて
 子巖の峯にさうり一河のありて百歩よ流て石客
 の歩みよ是とむさうり山里に襪ハ苗糸よありと
 いとも美里のけ者ハあつてもつてい
 山姥の音をきりぬめて哉せは信と心
 蔭言に玲麻の冥能にとある上弦の月若にうき
 也虚弓とつに海原路よのあり下流ハ谷よ
 落奔葉ととやうして唐よ似るるふよあつる
 爰に旅還漸よめりて柀を若緑のまにむと
 更夜曉よさうり神といふ此をにけり雲ハ若子

の徳をこめて天のたゞく抄入るる作を吾友其
 号あまのつをに坤くくよ紙あつん
 冷麻山くそゆる里甘ひ祿の善路の末は然とてふ
 六日子孟嘗君のむるは客よあつとては函谷の難
 の後夜をあつとてきつ山の中あつとては漸もさ
 巖扉くろくあつとて仁者の栖居つとては樂を
 涸水塘あつとて智者く御うとては托さつとては
 て邑里に出て田中は時を毎とてはたれんたよ見
 五田妙くあり或は耕しをのむとては論
 畦畝あつとてを無て苗を我とては藝とては民の

又父君ん祈の恩火よりにさるひまたの徳ハ子
 民稼穡の土恙より旱災あり水龍ハ必ず稲
 穀と獲て夏のぬをくくし電光ハ必ず九穂と
 くる今も三秋をまの東作の業力をくまふん
 西収の税よのりくくも劉寔の刑と志事たる
 蒲鞭定て堂ふよりぬん

苗代のあにうはひふあひいあ葉のそは秋のゆは
 日数あつとて古に色を赤くして立ゆり色ぬる花を
 子連ハいつとて山より連うあつとて年に入らあ
 外し物よ出て夕よ入東西を日乃光よつとてまふと



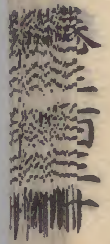
系に約あきて泥く申しきり久しくも又園中に
 桑の下宅ありともまた蓬改ある女善なりびりひて蚕
 養といとある園よハ條倒ぞく教將謝と持て農業
 をはらむ大くも禿ある小亭を却といへとも回をあらん
 きいたく是といひちることゆるおひのふありつてして
 より業をあらふありとも海ありて道にこそそん道実
 に父兄ありて入はしませしとも主君の志とのほ
 かうありあるものう

山田う川外月にあきハ夏外のいけあき子もあき
 幽月系ありてく終て娘若く人志のまりぬ道とてま

のまらるるをくめて萱はの者小とすかあぬ
 八日萱はとえて鳴海乃浦小来ぬ勢田宮乃清氣を
 ちよこ示現利生の業法よむと海川とて一心再持
 の講始りてんをぬくく暗く鳥居に白ひてあき
 口を觀しとてハ権現の砌をさふ家光の色に□史
 去来霧階て瓦上松風天に吹とくとも靈驗日新
 ありて人中乃公花まのこくにむけたりあきのたあき
 是林の松枝とてく幡蓋社从の上にあひひ今もわ
 の擔端をうい合とて神教の面よみく彼和光
 同墓ハ外縁とてさる初あき事とを憐む羊雙

東春の後悔は向前のうらみあると後糸の未来に
 向方此のふかき朝の今日も洋糸をもちて必由
 其の良縁をせん踏次の使指ありとて事あり
 此機感相付時之えをまゝつゝ其の果をなす誓ひあり
 的種定て其の名より海へ送るゝ長敷の的曉の
 神ゆゑのふかき朝のうらみ
 是とつゝはあふのうらみや何事よ物目なきは思ふ
 此うらみをくろくにはさし船よ入海して魚はあはれ
 海へははるる深き深き海へはるるをくくやめてゆく
 西天の溟海漫くくしてさきか茶くくくの中よ

小糸の舟のうらみに飛て白日のうらみのやう彼
 倭男の船中にてふかきやむふかき蓬菜の晴はる
 とく不死の糸とくくくくく波のうらみは無ハ一
 の歡合ありとて延年の術よはるるや
 心をくくく心をつゝにやふむとて名をくくくまの
 形此于深き行た小糸とくくくくくくくくくくく
 春はさあふ人るはあはれにあらんくくくくくくく
 海よをくくく我あはれくくくくくくくくくくく
 して死ぬるは外あり官へ走りて余いさ外よ思ふ
 ハ是の下あり官へを来てぬすもして死ぬ憐れくく



生替りてはのちうと多しとも分り約を麻乃
 毛よ思ふ時よ日暮しよかたして月星露は影を
 ぬ境をくやめたる河の音にとほりぬ涼夜よ立
 て今進ハ北川ハあり進むくもあつて海に
 ゆさうある波の河の石能は落る浪の音ハ月の光は
 あらうり川色に色敷風の音ハ夜の多白く又之
 ハむるのよ今うにハ月よりやにありたあきつる
 志る人もあきつる浪のよはをそあきつる月の影ハ
 十日たつ河を立て野く進まくれくくすとすくまハ
 半替りの糸よ云々の回替りの糸はあより替り若

木の枝よのちうと多しとも分り約を麻乃
 毛よ思ふ時よ日暮しよかたして月星露は影を
 ぬ境をくやめたる河の音にとほりぬ涼夜よ立
 て今進ハ北川ハあり進むくもあつて海に
 ゆさうある波の河の石能は落る浪の音ハ月の光は
 あらうり川色に色敷風の音ハ夜の多白く又之
 ハむるのよ今うにハ月よりやにありたあきつる
 志る人もあきつる浪のよはをそあきつる月の影ハ
 十日たつ河を立て野く進まくれくくすとすくまハ
 半替りの糸よ云々の回替りの糸はあより替り若

勝もつり 漸山 掃より 進く 匿宮 始とく 以 塔入
 たる 谷より あり 身を 控く あり 香え ちる ころ
 ころ 進く 水 韓 康 独 性 の 栖 花 の 色 反 乃 身 子 其
 して 南 北 龍 扇 舟 此 泊 り 波 の 声 夕 乃 冥 に 樂 ぶ
 塔 登 ぶ ころ ころ 然 々 あり 靡 離 此 と あり ひと して 中 天 の 其
 片 ころ ころ 演 膠 ぶ 八 変 進 ぶ ころ ころ 不 指 導 と あり ころ
 数 條 乃 臥 滅 ころ ころ 浪 ぶ ころ ころ 乃 々 乃 心 あり 進 ぶ ころ
 黒 白 を ころ ころ 白 洲 ぶ ころ ころ 路 乃 心 あり 進 ぶ ころ ころ
 砂 乃 幽 ころ ころ 優 具 ぶ ころ ころ 進 ぶ ころ ころ 皆 く 進 ぶ ころ ころ
 浦 の 系 紐 ぶ ころ ころ に け 人の 心 を 進 ぶ ころ ころ

け ころ 神 も 塔 登 の ころ ころ 然 々 あり ころ ころ
 夕 陽 の 影 乃 中 に 橋 乃 の 名 に ころ ころ 北 泊 八 教 電 海
 南 に 湯 け 松 具 ぶ ころ ころ 然 々 あり ころ ころ 之 に の せ 譯 路 ぶ ころ
 に 進 ぶ ころ ころ 答 号 ぶ ころ ころ 演 名 の 橋 ぶ ころ ころ 時 日 車
 西 ぶ 進 ぶ 半 漢 漸 あり ころ ころ 進 ぶ 月 輪 峯 小 早 して 危
 京 神 け 函 あり 浦 あり 松 風 け 師 も あり ころ ころ 娘 娘 の 身
 け け 巖 と あり ころ ころ 浪 の 名 あり 進 ぶ ぬ む の 身 に
 け け 神 父 の ころ ころ 進 ぶ ころ ころ 乃 け ころ ころ 進 ぶ ころ ころ
 七 編 の ころ ころ け ころ ころ 進 ぶ ころ ころ 進 ぶ ころ ころ 進 ぶ ころ ころ
 ひ の ころ ころ あり ころ ころ 進 ぶ ころ ころ 進 ぶ ころ ころ 進 ぶ ころ ころ

卷三十三

一

ふそとらと夜もそらにふる波ハ水口かまむとく
のうききしも晴らもり拵く月ハさみのうし夜をか
うゆりてあつむやうふすく彼釣魚のうせハあみの底
に入て魚のうをもをろく一教舟乃棹乃うさハまく
ら婦人にきき通て客乃袖乃女よともあふ教も
既にゆゆきよん星はゆりつるハかき通て者立人乃
神ハみえ海取ある考にましく通て志ぬなう
うらほき通て出の志くくく旧橋よまくとゆりて先
つじさうりつり具もさきハ橋の下にさうせらるう
はハかきぬ水をかへしとさ海にあらき通て志をさふ



風のあハかからとらえてさうむきともさうのいなき
霧中の鶴音ハ此所よ儲きり誰ハ水驛の松を
ゆき
橋やあぬ波も笑も程さうつまののびき
浪まらうらうらく者然らんにハゆりそちぬまの
ちるよ橋なとらハ橋のうらりり行くをあらへ
みきハ浪よまらうらみのかきとらるふうりとい
かへし路よまねの枝ハあゆむももをを河くむ
かにえりみきハ湖とくるふうりかんとるみか
ハ水の教よむらうりも西にのそえハ湖海ゆりくむ

ちりてせせりしきく風のたぐにひみ水口のくさ
 しのきも是もあけけきとも湖海乃淡鹹ハ氣味を道
 ちとありと滯のうにハ浪よ翳みさすくさあそあふ
 ぎ舟の中にハ唐櫓サとこ念秋のうあをのうえて
 ちたえにたぐいけり奥屋ハ帳中にあまじん感腸
 ちうりにとあてしせしやまててち前をうらまてて
 濱まのうにさくさくあ長汀砂浜してゆえくる
 うたぐり菊株ちくくして風波を急をあふせふと今
 ちハ又湖を呑ん別曲浦の如く吐出し濱崎珠
 ちを沙汰と則ち巖の急よくされく優ふふ

うか艶あるうねる難くまのくく余あふハ□年う再
 ひ来てせうくにすさん
 波ハ海雲にハ風のうらうよちと海邊にやめさる
 林乃風よをらまて廻澤乃やち波とまのうらうふん
 ちてけを岳乃色りハものあまを碧く赤ハハ波あ
 ち峰にまの山まを枝をうよとくしてまのまのまも水に
 うらまのまハちす急をさるさ海あてちよにお遠をち
 水と木とハ相生中うらうらうけちまうはるうまを
 白貴しそん石時既よまをせうまにちの夜のちと
 白くて池田のちれとあふ

三日池田を立ちて舟へ入りて林野のあけくさ
 めきともころりくみちとあきとらんを思ひて
 ありしと天中川をわたる道は大河を水西三町
 ころりともあきと舟をえ渡りゆく波さうしうて
 さやもさうしうと大なる机をもちしよとさ海ふ
 水さうしうとさうしうの玉覇う忠とあきとさ海ふ
 沱河漸むとさうしうにありと強持をう牛漢浪
 ともさうしうとさうしう浮木ののりやとさやうて
 上の登原を一里とるをすく道はさうしうの
 中川のあ

舟をが成あさく燈塔後風の香あさくよとあきと
 おあしと此方の秋葉をむむしてあきと
 夏あはさうしうとさうしうとさうしうとさうしうと
 山とつと今春をさうしうとさうしうとさうしうと
 東をさうしうとさうしうとさうしうとさうしうと
 事さうしうとさうしうと社よさうしうとさうしうと
 けさうしうとさうしうと薩城よさうしうとさうしうと
 うさうしうとさうしうとさうしうとさうしうと
 舟よさうしうとさうしうとさうしうとさうしうと
 舟とさうしうとさうしうとさうしうとさうしうと
 舟とさうしうとさうしうとさうしうとさうしうと

味を細文して其実不慮の感感ををき進つてま
 思ふとすくにうまハ枚をさる神のうらひ此をりしを
 社ありし跡よ小川をわき進ハ依夜中山より歌
 此山を志しうくのり進ハ危に深谷右も深谷
 峯ありきみちをたはくみ如人に似たりあ谷の
 枝を眼中にんし群鳥は時を呈り下に深谷其
 あけハつろく又山のあひこをすく進ハ中山といふ
 そりも山ハむくの九折のみちあるきうまといす
 ハあつたあち抄千條のみちありみちをたはく
 名にまはつ歌とらるあまハ一時のをもよ百段立

と海をてうらあつた折を多く素養はあつた
 として身をあつた高絃の風はむきハ危あつて
 て身にしむ
 かつまはつるさよは中山ありしあつて名跡を
 時に胡るむのめはつる進て日鳥翅さうりぬま
 余とやうかかんさめさく川の着ふとあつたぬ
 或家のくしらに故中津門中細言宗行つかく
 去付らむさうの彼南陽縣の兼水下流を汲あ
 うらひをのくは東海乃の菊河西涯にやうり
 余を食くさん事とことにあつた進とらをおやゆ

身八累紫の賢枝よりうまき色も友ハ茅門を
 たりと踏よのゆるをうらぐの月のまよハ冠の光
 をまよハ仙洞のくふの下にハ綿の袖の色とあ
 らせふまたりと紫糸にあまうて時くとねと白ひが
 人を道をひらいてちのこもきくうひをささともな
 せよともゆるうねめらんむとハ思ひやハよる人ささ
 てもあさまよや去来久三年申旬天下風あまて
 海内のあそむるもと國礼ハ礼おん花城よりささ
 合我ハ我士ハ夷國より我暴雷雲をむくくして
 日月光とせやくと軍急比とうぶくしてら双威

をめきふまあひと新歳ハ山の急風ワもきて枝枝
 あり一徳の河の色波あやすけてにあらも我まて
 茨山流水ハ源流たぐくありきくるうに西海のあ
 にくくりに相羽林の花族と我くはれて東園の赤に
 ちりぬまきこのとにあは別離まは月のゆらりと
 ふうけりぬき井とあてて、椽のせきにはとと新築
 山の竹のあそぶくにうきくう風のたよりととえあ
 外土にさまよふ花めううけうむういもいもいも
 綿帳玉端の床ハ主失て武客の者とあり兼水雷川の
 貢教をばくして色はみあふとありとにささるる

たるを以て神をさしめし一筆書千歳は翠ちりこりし
 いさあうしそえん船夕にうやまひて神我れきめく僮
 僕もぬれん知恩れきう詠さう抄ひひあうらうの道ぬ
 実に舎者定離のあひひ目のす人よん括るに利利色
 首院もめくぬ奈落のそこはあうと海はく道よそ
 抄りあき今いあきくともたじくへそ人もあきせ八海を
 されそそく心くくうちそぬを身にきくくふまのひ
 甲曹乃兵うらうと一騎の容ふくま目にきくしあめ
 双戦のほろさ魂をす神のしひにぬめとをきて命
 のとさにく書付く道くうそまうはみあぬ

神の心をあうしぬへく是ゆ終

ちう詠あうはそとあう道とあうさだ詠あうさうの
 者の旅人

妙井渡と云ふ乃登東とすく中島の首はあうりし
 小暑の季やうりくももふとまう納涼のあう
 あうはにむとんん

夏涼さ清あうあうを八約とめて志とらひま八日く道

播豆飛乃首をむとれて大堰河をわさる此川かへし
 中に渡り抄りく又あうさうさう道をおえ鳴をへし
 ちう詠くさうさうの道そり此及と二三里行ん
 四學あうのあうを橋をさうく時に水風例よ

又去之越前の山姥とつてよ初をむつて飛ぶの定は
行く所へととまきこむる此あひこの山はい後に
はるううはくにみつるの時のとやいんあやといん
むしを今とせりハ我身むしり今をむしりも世ハ
我心うし古今をふるはる物ハも心の中懐あつた
死涅槃始昨後といへるもあくる世にいそおるゆ
時のとやあといあふの夏とあるも今日此取をととく
数時るいつ世の世といへ今いそあふといへん誠り
あまのなるこの歳月を後より花めにいけりぬ
時のとやあとい山路ハ雪よりくもにいけ

あまの又きけはむにせりる人あふいつ世の山を
自越の者にとあまをあふをやといむしりるも越をま
て世邊をくろくといへんをみもハあまとい
見はまのくしめありといへもさむしりるものそめん
白露まこさに秋の夕に似てあまよをさうのりあ
るまろき山あるといへん甲斐の白雪とてふとい
ふあまといしといへ今あまハ人といへも此あひ
敷目のまろろきし張包いあむて百とをけよといへ
のつりりといへんくともあハト界けいあふといへあま
といへ

一 相々ぬ命を建てるはあまのついでなるゆゑの志は殊に
 守度のたゆまざるは浪のなるせのゆゑに神よと
 とむるありと海の東山に大地の山とありと四方
 なるくくもまて四の末たるなりと堂閣無常
 して山中堂の儀式なりと二宗後禱の志は十
 二廻中にせざる事なく安居一夏たりと採心法
 水乃法とも験をありとふ修する事ハ申たの法
 論法を言ふ修心願に交して利する事ハ下立の
 生後依ををるとのさうひふりて伽藍の名をさ
 けり基不所の建立土木の風情は高き其た

なること観世と申す補陀落山の聖容出現の
 月ありとありと大形仏法真蹟乃をさり数百
 箇歳の星漢を相妙なりとあり僧俗心位のさる三百
 餘字は禪房霞花なりとあり雲船の石神ハ山
 腰に護て悪障をふさぎ大形の赤容ハ目一納
 て吾業をあらふ事観音なりとあり石舟に紫
 なる此地よりさるなりとあり舟若神とあり
 山路の大坂より舟護法とあり彼海岸山乃舟
 眼を南方より山を飛てを縁を此山より守字
 濱の品天曲を地小地と舞系を此濱にまふへり

ゆの 福河大吏とふ人そ人の演書此下に樂成
あへて舞多をさすあひ舞多り又人のるを
みてるのこくに花をさしに流よるもそ流をさ
と一乃面形を落さり大吏の道をまて寺に家おと
まよりしてそちに舞樂をさへて法會を始りし
も大吏の子孫舞人氏といひ二月十三日常樂會と
て寺中姑大吏ありそのうち天人舞も廻るはるの
心の色そにこまるとか風ハ歲月のこまらして
此演をまるとさハ松推琴もてあまにつみり天人
の樂今まに似たり

神よりして海をとり羽衣の舞も舞よるあとの波
は虎の浦をとらさハ喜若るに物ひ思市破にと
ふ南ハ澳の海水水くと波をとりしを孤帆天にと
むハ茂松林けくと枝をさして一途はるるとふハ澳
吏の細をさしきりすきりんとさきをささ
み遊魚の物をのび余をやらせ余をささるは
と人いくくくり利をささる魚いくくくりの餌を
ゆきとむる世をささるおさひををささるふさる
ささるもささるもささるにおさるささるのささるに
あさる推吏ハ風をささるひして夕ふり入るをささる

福河大吏

二一

あへく高容ハ白鳥をこらふてありつぎに出面く
のきよのみまきらりありとてとも冬冬くはるるに
みるまき渡世の一車あり

人にとくか心か事とも世成とらるみちのむら
然うをくらうにん渡してし海雲ハあこの名を
に根をくらあまきころる海月ハ湖のうへにありらる
うまともにあまきうき世を論く人をつまめり

浪のうへにたつて海の月もあつうの事し我を
清見うせとをくらまきハ西南ハ天と海とる低をくら
にまあことをあまきうきと破と嶮難あり

星をほまきつて船者の下には波の心風よむつてま
のさめあく峯のうへにハ松のさみとりを合
て秋をおまきと浮天の波ハ雲をけし月のこ
ゆの夜おして兒沈陸の破ハ船をたそ風の使用
あまきにゆきとすく名をたつるあまきとすも
奥をえす舟に駛るあまきとすも目にあまきと
舟目ハ感ふく川ありらるハ此うにあり浪の
あまきとてゆきとるに \square にたると人々風むあ
まきハ峯柳ふらうハ峯のゆきハ椿花あまきと
るあまき

関所の色に布をそくみとふ取あつてせき
 ちり布をそくつるはのりしてふりあつてついで
 吹をよき清らう風守建貝むらふ海のおふ所が
 ちりやあふちり清らおかしく神よめるおみ
 海をいかなにおよそる老ハ訂よあふよふと
 むて腰のゆる汝をみるや生涯うえるいのち今
 いくはく我の志うると幻中此一瞬の身かあ
 おまのうをすすむる志ふかまのあつてうすに
 うの神うちいほま色光ふ小魚をそくし
 て空上に鱗とふきり松のむら立みすみのむら

心あきせよもそくあかん人よんせまうちく
 ちりあつてせき神よめる波むらまはちう風吹
 沖崎とふあき風飄くと翻く砂をまう波
 浪くとそくまて人をそくする初春うにそくさ
 ちりそくちりそくせむらみそくちりひいてそき
 とゆるたハ噴岳の下と岩けんと海をそくめそり
 右のちりあつて浪若う人をのそめん眼をそくへ
 ちりそくちりそくちりそくちりそくちりそくちり
 沖中にあつてそくをそく飄帆飛て万里風便を
 たのちり白煙にいと懸波うらそくちりそくちり

其初を去りて其後を去るのむ減はせよと
とありともう後乃ち其を推す人ありて
いふにいふもあはれきあるにあらざるのあふ
何といふんや我も人もう世の世めあまの
海のいよつとあはれきあるにあらざるの
の標をとりてあはれきあるにあらざるの
下くさゆてもあはれきあるにあらざるの
もをさるあはれきあるにあらざるの
うあはれきあるにあらざるの
よそにみるもあはれきあるにあらざるの

細言浮城が東城とてそのをわかにうをのりるもの
途くものありては按察使光親の侍僕と君は遺骨
を捨てたより其とあはれきあるにあらざるの
あはれきあるにあらざるの
えよけえあはれきあるにあらざるの
虎はよりあはれきあるにあらざるの
えよけえあはれきあるにあらざるの
すの東より我もあはれきあるにあらざるの
落つてあはれきあるにあらざるの
とあはれきあるにあらざるの

あぐさのそのうみのふあふひをねまじり情もあぐさ
えのゆき

ささるふふふ食も木のほろき相よがるあぐさむらうき

ナガノ本流川をまきて遇決と云管束成とく北登

何ろさてもあぐさひききとたけけハ細言多きとたけ

てくやへ鶴へーとせきん多に心中に取作ありと志

くくくととひうもきききききハあぐさううに色けけん

またとに梅のうらかりのくものあぐさききあぐさききや

も鬼のふらにぬき牛頭のとつひにうへんとと教派

の底よもぬきあぐさひきききききききききききききき

あぐさあぐさの葉さいとと二度うら梅あぐさのけん

ささるふふふ食も木のほろき相よがるあぐさむらうき

あぐさあぐさの葉さいとと二度うら梅あぐさのけん

にをらうききききききききききききききききききき

秋をいふふ花人うふたをそあぐさの秋さす木の葉と

登りて梅葉使たき清智首雅卿おあぐさ北系にて

と志のあぐさの志はきききききききききききききき

友人はゆめ生あぐさあぐさの秋居あぐさききききき

あぐさひききききききききききききききききききき

をのへてききききききききききききききききききき

をあしあくさみぬ魚しやうきつゝあはうとせを
 里城ニヤコの糸は着くさるる壁東のをむらみち後せ
 ん時いさしき時さうしきをゆかし慣くさる
 秋乃天の夕紅霞誠し時の笑舞子の遇はあふし
 いともろくにさきえせ乃省業のむくぢる例し
 折々の人々を官班身を名譽のさう張あく君息
 あくまはうらりして階面のさう一人をさうし
 ちりさくさうとある必し似るあき中に笑つた
 護の糸の貫首さうし一門のちに捷をわしむさ
 物乃を信さうし可様の庭に縁をとくのへさ流

うおりのみ天俄は笑をくさうして天命をちる回
 地をちるまはに天をあをて地を成うあふしと
 あくまはうらり入束のよめは流はふと勢此記急に
 結ぶの海泉乃天魂を九夜の柱めにすしひまさ
 せしもさ悪さう流小流さうして生死をたへ眼を
 とおしんさうつ井に十念相續して他界さうしうら
 夏乃終秋のくしめ人酔世にこらうしを間乃妄念
 へさあしんあき南西乃疎隔観音持のさうし
 のま心あをさうしあしんあき東運をのさあしん
 やさ若人への別事しつゝ遊遊とうらあうかしてさう

道ハ後茅ヲ束ニ風ニ吹ラセテあぢく草葉束に委ね不
 流ニ草の郷ニハリハあぢく草樹ありける別道ニまゐる
 のさうひとあぢく草のさうひとあぢく草の中ニ於官位
 差乃差々そのまじく能にありて絶如樂業を
 あぢく草のまじく草のむらにまゐるとしてぬ死出山路
 に入隨ハぬあぢく草の後のうぢみをつつせん
 東乃みちにむらありてあやうき武士にいささか
 ひくさく後のうぢみとあぢく草のあぢく草乃眞更呵
 責乃場にハむとて自業自得の断罪ニ舌をま
 さ此妻息別離のたにハ各不きこふあぢく草乃横死よ

後をやれ生てはむらも死てのうぢみをつつあぢく
 後乃ちんまをうはつてもよあぢく草一はつて
 あぢく草をゆて是ぬハ二世乃ちさうむあぢく
 ありとさうらうらう世にもあぢく草の水共あぢく草
 草ハ是相山城あぢく草の関の下に者にとまら相
 日暮鳥むらうらうらう林頭よ踏鳥福くらをあぢく草
 山乃此乃竹乃下とつとあぢく草の海乃は乃ハさ山
 にて一川谷にありて是風あぢく草をあぢく草ハさ
 松のちんまをさして神よあぢく草ハさく月のむら
 福是のありひにまゐらんむらあぢく草のあぢく草

夜をあつひ

月一人よあふぬ乃後此名あふかき終ふ月よ雲風のそ
 更敷敷乃あじの松ゆ引ぬ後も夕やこにをさうり
 十ふ竹乃中をちて林中をさうりてとるくといゆん
 ち末れぐく我独深にさうりてとるくといゆん
 ぬてくのちさく人君子松いほしくてき人の風を
 笑をとるく人客雲松よりさありてあふ乃のさく
 ちさあつたにさうりて物乃るぬゆりて松のう勢を
 の虚名をあつひ人程あく日岳の赤にのちを
 ちて中や驛跡乃天よんさぬ彼山祇のむりてあつたに

花女うはよほく人嶺猿の文はあさひゆ人の心をさすま

し若者墓乃着の君女あさひゆあえける時山神翁よ化して時よ

いさを知り人さうりてあつたにさうりてとるくといゆん

万奴をさうりて樹根よまるとふてあつたにさうりてとるくといゆん

うい若乃松根をうかりて脛をのくく山中をたふるの

ちさうりてとるくといゆん

秋あつたにさうりてとるくといゆん

閑下は着をさうりてとるくといゆん

者してまうりてとるくといゆん

更とひあつたにさうりてとるくといゆん

の二枚乃花めにむしとひ生涯のこほをを往還せん
 諸人の屋にく翠帳紅團万草如禮法をこふと
 といへともま唐は宋元一生涯を觀念をこふと
 といへともむとく山の谷をふりたるの白ひもたるハとこ
 道の順たるもこも省城送川と云ふととゆる徳のた
のこまゆよあつるは 少くは斤屋田螺りらすとさみそ徳の
 焼おき青紫よまると南の満海蒼波やさあつるを
 白ふあひひやるとあつるをさふは河東西素布をを
 ぬるは浪よあつるとい後を町住緑衫を万とあつるは竹
 木のり時よあつると日拂の糸をを鶴の雲よあつると

省跡人の髪を同譯のむらむとふ彼まにはあつる被
 馬の朝必を思ひて心風小動へ形にやとむ群牛の異地よ
 ありて秋は月に鳴棹歌を舟船を月變のをとらにを
 松琴万曲琵琶を尋陽江の河にさく一生涯のひか今秋の
泊りにあり
 行とまら秋色のあひのよは月旅のの裡まとと
 ナなる送川をさきて平山城をこし高倉宰相中將
龍峯 管峯山ありと急河と云測りて底のこく
 川とあつるにさのほりくそむのをあり人あつる
 にこそおるゆき日本國母の考えをややうひ芝の末
 よ身をとりし天子聖皇の恩波をさくく波の末に

家をうらやと羽林のくまあつたよむけくろに
 あへふにふひ天下にまう射山乃風あつてうにあ
 めく時よあさるむくを近よゆふあらうらや
 兼本山風をくさてまうくふちうらとゆふ遊水
 あつてまゑにうてまゆ泡とまゑんといま枝の柴
 かこえんやうおまぬあ苑乃地あもむあくはれ
 思船船乃むつむ一類をあつて他は乃あおらて
 うらう一まうにうまぬ然あは三家のあはまうら
 ぶとあつて氷あはゆあつとまみのあま鳴咽くえ
 衣傷をあつと

あつてむてうまぬあはまゑにまほひ人のあつて
 此法まにあひるまは一條乃宰相中將 信能卿 英法
 必をまをうとあゆまはあ乃命をうてまあま
 浴中にわつてまゑ日あをうあまううらみま
 悪業乃あつてらまもまもまもまのみちらにまを
 めまあつてまにあをまゆらあも還てまあま
 まゑにあつてまうまうあまあを念をままじく
 して魂まのまふまの縁終乃あを論まを性生
 ともまあつて西方に八聖元定て九品の寶蓮小
 子らまらん彼羽化をまて天淵小あをひくま

八夜のむらり露のつらさをうらぐらぐし鹿角を
 煮て仙洞よりやう乾果茶の花寶枝の風を
 寝むさ傷む平日のうを成果ふくく末西天のき
 にうさゆのさるに夢堂の扉あぐとちを山印あり
 ふうらむとて成心成麻をあよりさうりえ踊よとぬ
 心をまわし親族があめとむさうあく様よ出ん
 心との心さしぬ楊國忠う他界にうけつりし志しん
 人うらみをさふいと成平孝事此を山よあろ
 心ゆめいひやうとさうりうあをゆくみあんこと
 を彼東平王は回星をおもふ境より風をいふ

心く誠よさうととあぐらにこそハそんゆき

おとしひさや都を秋まにうの道路のをし心登に家
 主人のうまもつるハ庭にあら木葉の風よううく
 うさう風やみぬさうこうん死と思へん縁にむ
 行客のやとふとさうりうさうしにわの道ぬとて
 ともかいらはうす道ぬさう縁ありううのこさる
 事をかめし心愚痴心心をさうさる事をうしむ
 海しんやく別道成物まん人ハ森舎を一仙り雲
 紳思をちん日とハ道福を九ありみらに翁
 と更にあまうく後束の家あもとよりさうん
 ちんや

大坂のうゝ小坂のうゝ坂ぐるぐるとまはるのうゝ
くゝあひのうゝにうゝみしてまゝにまゝにまゝに
あまのうゝにあまのうゝあまのうゝまゝにまゝに
うゝあまのうゝあまのうゝやんぱくく

大坂や小坂のうゝ坂ぐるぐるとまはるのうゝ
くゝあひのうゝにうゝみしてまゝにまゝにまゝに
あまのうゝにあまのうゝあまのうゝまゝにまゝに
うゝあまのうゝあまのうゝやんぱくく
大坂や小坂のうゝ坂ぐるぐるとまはるのうゝ
くゝあひのうゝにうゝみしてまゝにまゝにまゝに
あまのうゝにあまのうゝあまのうゝまゝにまゝに
うゝあまのうゝあまのうゝやんぱくく

やばりやらよのうゝにまゝにまゝにまゝに
固津川をうゝりては虎の海江をまゝにまゝに
一草は孤山あひも孤山よ靈社あひもは虎大明神と
中威験とにあまのうゝあまのうゝあまのうゝ
よをまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
をまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
華経を説くまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
形出まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
うゝをまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに
て糸をまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

系をたゞしくみまは海とにむつててふの山より
 只ぬ敷穴よ入て純尾ふはきつり神託形
 して後傳ふくらしてま事を令とと之も史権現を
 利生めさうごさの化現をハ何そまうごにんく
 うん弘隆を讀誦の傳あり経をきまハ何を傳
 をいとくんやあうさちうひうんまそあ波よを
 めくあとい品神ハ天ふ知まてのまにむくく志
 せきても神まは人まうごまうあうごに
 ちうごひてゆくあうごまうごまうあうご
 にはまうごまうごまうごまうごまうあうご
 ありん

跡力世よまうごまうあうごの山りまのうあうまてまうあうご
 いとも怪るあうごひかて奥あうごにあうごまあを
 きてををみまはむうごあうごらまうあうご
 ありんかまうごまうあうごまうあうごまうあうご
 とまま山りあうごひををまうごハ稻村とまああ
 まうごまうあうごのまうあうごまうあうごまうあうご
 ちうごまうあうごまうあうごのまうあうごまうあうご
 うに身をまうごまうあうごをまうごまうあうごまうあうご
 申は斜よ湯井の濱よ落る者ぬまうごまうあうご

此取をみまて敷百艘の舟ともつあをくさりて大
 はのうらに似たりちりさう然宅軒をあてて大流
 りやうりに大とあふく沸靈の多居の兼に日張
 くして後若また路より宿取よつとぬ月さりの
 りりて取も本に更よ多事ハをささるるを人おんは
 かあおるえんて

初小日をまつ人を思ひをさてあつまた月を
 鶏鳴ハ夢のあういさ猿宿一夜のためさうえん
 ちりか人まてと月乃光能上の西よかすふさぬ
 思ひや故初を西よありとあをり月さるやけん

十八日は若く南の軒にさるる丸山あり山の北に細き小川
 あつと若くあつと急落して夕乃神をむる人し瀧水を
 ささるるて夜の後をあふく事比格うりかとはるあう
 いっしう周境おもふりし侍もいまま猿かまき今日ハ
 ひかしく若く山相知る人ハ一人侍をれとおふれさ
 んとおもふ程よさうつひてあふ事ハいさくたあつて
 若のめはる人ハをささるるい貝あふぬよつえん身を
 さぬ人ハおや多事ともうとけさハおいとんま中に
 ちりさうさむさむさあつとあふく不意に面鏡をとく彼
 事乃の後に似る事をあふく事さすて次よむのに

かゝる事をおけくそくひに心懐を述て暫相懐
ふそ後立出てみまはれとあらぬ京延ハうみあり
山をふまたふありと原さよふあり狭まありは
街衢のちまゝさくさくしに通ちて實に北裏お
けし邑をふひに里都を論してをさうなるはく
真如をさくひ賢をさくふ門擲志さく成あり
て地又懸つてをさくし將軍のそ居を垣る身
まとい花堂たうくおしむといし翠竹庵のまを
をゆくみ朱欄妙よりまて玉砌のりしと光
みくまにありとさうなる急ハ好客堂より心
に

あさくありありとをさくし龍蹄ハ糸舎のま
市に嘶ゆ論もみまはれとあらぬ京延ハうみあり
まをたうく照て糸人みみ瞻仰之風塵をさくふ
威験をさく誠て賢もさくしとさくふおさるは
次や旧水源とみまはれとあらぬ京延ハうみあり
うらみし新花菜鮮もさくしとさくふおさるは
万歳をさくさくしとあらぬ京延ハうみあり
素郡國のりしにほくさくしとあらぬ京延ハうみあり
室を馬をさくしとあらぬ京延ハうみあり
ハ心を調てさくしとあらぬ京延ハうみあり

幣風よ抄くも女さき根乃縹ハ朱檻をみく錦の
 けくまいたかかにむらう人教志くくく法施をて瑞籬
 に作しとまハ神女うくは曲ハ権現密流乃隠教に
 うあひ傍侶乃經のこ志た飛生成道の因縁を伸
 彼法性のま乃う人よ寐光の月をくつとくとも
 着ま乃林のるに懸身は風あふまてあふまあり
 雲らたう人にくもくぬきをわくともまよふ下はく月
 月のゆりうとにあふひまて石屋堂乃山のあてま
 ろうにありたててりまてくくくくくくくくくくく
 乃らる終さく一切くあまても経也つづの二旬にて

上洛すもにむ更になりもぬまハあらのたむしを
 まもとも出あん事をいけく時に耽滞のうらちおとろ
 うをハ水くとおのひはるるな乃日もあふんあ人あ著
 ぬ一樹乃うまは若縁あさくく拾遺乃むらひさ
 約ゆくとも人あつと

延一

旅夜あまてとて拘引名抄よハくぬ神もくみまを
 五月の午くく敷時乃の一あうはるるにあをあんとして
 是ハ首蒲乃一夜乃まくくら再舎不定のちさり成

いまもいづこもあはれなるより子らへのまじき苦み
 白り波よあはれまじき一滴のまじき波まじきことを知
 に着夕にまじきむらあはれまじきけしきとて感もあはれ
 祈り神よ祈り功也まじきいづこも我まじき仏神ハ若
 華のあはれ小擁護のちりひをおろし經海ハ報恩の
 多きに讃嘆ありと榮をのくると壯齡のむらハ
 將來をまのく天に祈りまじき哀遠ハ今ハ之報を
 叩きまじき身をうしむらまじき不信のまじき
 おろしまじき感恩ハ月夜まじきまじきまじきまじき
 去り福田をまじきまじき現をまじき負累とゆらまじき

之報よまじき仏ありまじきまじきまじきあや誓願ハ
 まじき我孝ありまじき信香まじき感し
 妾恨もあはれにおろし天眼ありまじきあはれまじき
 連綿ハ悲母ハ目赤に中懐を謝し白髪をまじき
 忍子ハ身代ハ人にあはれまじき黒髪をまじき事
 をまじき此筆ハたまひ一旦のまじきまじきまじき
 あはれまじき海のまじきまじき九品のまじき
 まじきまじき子まじきまじきまじきまじき風樹
 風の根のまじき事ありまじき
 まじきまじきまじきまじき秋まじきまじきまじき

東國のあまの仙法の神なるあまの教心乃沙弥をてん
 終りていさ方をあまの友に本方神教乃因地より
 蒞りて金刺極梵の果つを問ふんとおもふも觀史
 けうりくくさ濱路をさひりさにも白砂あはれおも
 かりくもまうて極樂令繩のなちにおもひやふも
 松のうけさ根樹七をの風空若のち念とさうへ
 此系道子紫乃色に深功速の池よハ有願愍のあ
 をあつひ若根のくやうにハ樹莖提のちめふを
 ひとふおあつるま殿さ方小苑を居あつるも
 こに利生を約縁とせしむ人たる説法集舎の陽

にもあつるて空を乃余を延年し来るむつハ
 志見仏法乃室小誇り不退の樂に世舎と久
 をせくの父母と恥不足の如來よ成さるを去
 乃妻子いかりのくして新来さ美隆よむとむさ
 法教祥悦の味く口のうちにみち端嚴神妙のさ
 ハ身成入にそふくもつをよそ三土令の月胸よ
 たる道才一後元のあ心にさつるも此友に吾始來の
 神乃ハ松めあつるもさ大經論乃真ハ盲眼む
 けするも彼母も念王乃古口をさつるもさり沙女婆
 よあつるも法苑因位の旧信を成さるもさるもさ

我亦いづく此は依り九品是王の善政をさす一念
 なるはまあふひに平等の接の業にありて
 諸天薩埵の念後をふん六賊重罪の犯却る皆
 度身漏の旨を奉ると七宝の言を度は八四十八の
 五五劫思惟の功のりてをくおらして念仏のものを
 ても二脇片度には三十二のる大悲弘折云のあや
 きて若海乃沈没をよとふあよ二世乃仏の海
 交にもつくる五逆の罪人も若海不捨のみに掉
 きて彼岸にまゝありすあよ浄刹よとせら
 する北界の悪候も大難逆世翹よのりて西天に

飛んあぐもくく生也やがらに今くや那

あや風もあやの此ををいばえんるあやうやを

迷ひまを又あよひんる地やにあのくくんやん

東國にままひひり子ありあのやを別てり

聖といぬやり西刹よ坊る母いすひあも

とてて彼處に辱致を母といすも仏の三字乃名

号をふともにとりきて三因仏性乃から

心却十念の来迎を定福よちとあし十地説王の

乃位よはく伝かよんものには他力をあ

ち進をすくふをせゆる赤子を親乃

うたてし意緒はよに形流よとつりてをみるつらと
 すむ驥よはく馳り千里に翔るつらとつらと
 具情の浮承ハ一葉の香にまよふて三毒の
 酒よ酔婦と世路の嶮難ふつらとつらと
 にまよふつらと妻子をおもふ心真よつらとつらと
 ら仏のつらとを為さしてその美提の麻ハ罪業
 ら山よからきて旅ともいふつらとつらと
 如く年を別して追とも入つらとつらと
 さらつらとのつらとつらとつらとつらと
 をとつらとつらとつらとつらとつらとつらと

とも分岐りむを為りたつらとつらとつらとつらと
 怒つらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと
 みるつらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと
 風のつらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと
 心をつらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと
 ハ若くつらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと
 きてつらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと
 とつらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと
 ハ哭つらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと
 獄よ落つらとつらとつらとつらとつらとつらとつらと

下して心より黄泉より中一草己のやうに
 溺して身をぬくは心ありさうに 獄卒は呵責を
 かりして後悔魂をくさしたる王乃断罪ををの
 きてお兆り舌をまく悪りくらとあつらん後
 り中如新自業のむく人陳くくしれより文鳴
 呼十八猛鬼の忿怒といふもる怒天雷の打ちぬる
 うをくくし平四眼の睚眦といふもる熟珠のやとく
 然よ似る跡とすもも跡るにむあし又りぬる
 とらりよせんといふももよけむとと楯よむと
 とさ心うさるか猛火乃薪とありて万億歳罪根

山乃林交むさうき嵐のあり沈て空屋と劫業報
 池のありまに別する我々の前罪をに謝をんを
 後悔まといふももさうあらん人をもさうかあ
 まさらんや
 ほんのくもやういふ心もあつらんも身にそり
 但極楽西方にあつんをのむつる名心あますにあるも
 泥梨地ろをさうあつんをのむつる名念のん比よ
 ありも流絶うとさ仏よまよらんみりううむあ
 素性よあつる獄卒志くぬ鬼よあつらんみりうう
 所感り業流よありも雪はらりて山をぬくとまの

いとも流来世々のつくまをむつたるる六経の拙を
うしと今もいそむるとちりあり九品ありや六そいま
ふんていハあつていそむていハあつていそむていハあ
きたあつていそむていハあつていハあつていハあ
えつていそむていハあつていハあつていハあつていハあ
時ありあつていそむていハあつていハあつていハあ
又あつていそむていハあつていハあつていハあつていハあ
またあつていそむていハあつていハあつていハあつていハあ
ハ口ありあつていそむていハあつていハあつていハあ
に愛ありあつていそむていハあつていハあつていハあ

りるにちりあつていそむていハあつていハあつていハあ
ままりあつていそむていハあつていハあつていハあ
今生を生死の終りあつていそむていハあつていハあ
人此とよに生きていそむていハあつていハあつていハあ
貧子ともあつていそむていハあつていハあつていハあ
子を皆令入仏たるとよらあつていそむていハあつていハあ
のつに誓言教を教して此教不満足と舌をのちひ誓
不成正是と口をくくあつていそむていハあつていハあ
出のありあつていそむていハあつていハあつていハあ
悔り等事をつつてあつていそむていハあつていハあ

心へんこにたよりあまの作を述て用ふんとは仏種
 胸よりはらへて終つて死は歸して宜くささるる魚
 杯を連ハ舞中此京越はあらん存外のあさ死狂
 云之抱る魚はあつたハ魚乃ちう詠をさるる人々我
 あつたハ我らさうを惜るへうは駿蹄の子屋よん
 ともも奴る詠乃思尺は寒くも心さう人柄くおとハ
 いそる取たるのくハ大風の雲にけりをうらやな
 小鳥乃すつ死はあつたふくうらと此水家を物始及
 小入一肘身乃あつたに催さ述て人先嘲をう
 里と人急懐乃をうたにあつたを記と他其人を

にあつたをうらとあつたあつた人あつた述む人順送の二
 縁とあつた一仏去に生れて一切衆生をうらんと
 心へんこにたよりのあつたすれをうらひはるるあつた
 心へんこにたよりのあつたすれをうらひはるるあつた
 心へんこにたよりのあつたすれをうらひはるるあつた

心へんこにたよりのあつたすれをうらひはるるあつた
 心へんこにたよりのあつたすれをうらひはるるあつた

[Faint, mostly illegible handwritten text in cursive script]

南海流浪記

仁治三年壬七月十三日寺新詔經年月而不達
末院凶惡忘中末而具盛之間中寺前後企殿向欲
治罰彼凶黨之處天火自然出噴風歎尔此一院僧史
成灰燼了同月末公家被石齒寺搜授即八月始全浴
即被石其惡行張中之首淫進彼骨張十人更名了此
十人付長者悉被石了同年年拾月末但傳法院注
進交石本寺省老寫女六人百符被少之去月十日奉
六波羅之度即各被執武士了同月下旬日有南方對
同傳法院巧出飛毛條入穉中詔偽非論雜然其花